

I 研究主題と副題

主体的に学び、確かな学力を身に付けた児童生徒の育成 ～ 「高鍋の教育」を広げる・深める取組を通して ～

II 主題設定の理由

1 2030年問題とこれからの学校教育

2030年問題とは、2030年を迎える頃に表面化するいろいろな問題のことを指している。原因の根本にあるのは、人口構造の変化であり、国立社会保障・人口問題研究所の発表によると、超高齢化社会へ突入した日本は2030年には3人に1人が65歳の高齢者となる。労働力人口の減少、年金を含む社会保障の問題、都市部への人口集中による地域の荒廃など、様々な課題が指摘されている。また、グローバル化や情報化が進展する社会の中では、従来通りの型にはまったやり方が通用せず、先を見通すことがますます難しくなっている。このような急激に変化する社会において、学校教育の果たす役割がますます重要になってくる。そのため、文部科学省では「2020年の教育大改革」を推進している。具体的には、マークシート方式の大学入試センター試験が廃止になり、新しく大学入学共通テストに変わる。大学入学共通テストでは、数学、国語で記述式の問題が増え、知識だけでなく思考力、判断力、表現力も評価する。英語はこれまでの2技能評価から4技能評価となり、民間資格・検定試験も評価の対象として検討されている。また、新学習指導要領は小学校で平成32年度、中学校で平成33年度から全面実施となる。では、「2020年の教育大改革」、そして、新学習指導要領の完全実施により学校教育はどのように変わるのであろうか。

新学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」を示している。教育によってよりよい社会を創り、社会と連携して子どもたちの「生きていく力」を育むというのが、その理念である。その理念を実現するために、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という3つの方向性をあげている。また、新しい時代に必要となる資質・能力として、①生きていくために必要な知識や技能 ②思考力・判断力・表現力 ③学びに向かう力、人間性の3つを身に付けていくことを目標としている。つまり、社会に出てから自分の夢や目標を実現するために必要な能力を、学校教育において身に付けられるようにしようということである。本研究所では学力向上を「自分自身と自分の生きる社会全体を幸せにすること」と定義しており、このことは新学習指導要領の趣旨に沿ったものだと考える。

2 「高鍋の教育」、教育研究所の果たす役割について

高鍋町は、宮崎県のちょうど中央部に位置するまちです。県内では、最も小さな自治体になります。西都・児湯地方の中核として、行政・教育・商業などの機能が狭い地域に集中するため、付いた呼び名が「コンパクトシティ」。一方で、「歴史と文教の城下町」とも呼ばれ、高鍋藩主・秋月種茂公が創設した「明倫堂」は、多くの優秀な人材を輩出しました。

(高鍋町観光協会ホームページより)

本町は教育委員会を中心に、教育実践において4校の足並みがしっかりそろっており、各学校の研究テーマもすべて学力向上で統一されている。また、高鍋高校や高鍋農業高校との連携も進んでいる。実際、本町の小中学校は生徒指導上の大きな問題はなく、比較的落ち着いた状態で日々の授業が行われている。平成30年度の全国学力学習状況調査の結果を分析すると、次のようなことがわかった。小学校においては、国語・理科は全国平均を超えていたが、算数は全国平均をやや下回っていた。中学校においては、国語は全国平均とほぼ同じであった。数学は全国平均を上回っていたが、理科は若干下回っていた。また、中学校では学校間の格差が課題としてあげられる。

本町の教育研究所は、今年で32年目となる。運営方針の中に「研究推進にあたっては、実践過程を重視し、その成果を踏まえ児童生徒の実態・変容を含めたきめ細かい記録をするように配慮する」「共同研究の成果を、教育研究報告書及び高鍋町教育職員研修会等において発表する」とある。つまり、教育研究所の研究は児童生徒に還元し、本町すべての教職員の

授業力向上に結び付くことを目指している。このことを踏まえて、昨年度は4校合同研修会、研究所便り、「リーフレット（目指す高鍋っ子の姿）」作成、「高鍋町の授業スタンダード」の提案等を行い、これまでよりも一歩進んだ形で研究内容を伝えることができた。しかし、すべての児童生徒や教職員に浸透させることは難しかった。そこで、今年度の副題を～「高鍋の教育」を広げる・深める取組を通して～とした。難しい理論研究に固執することなく、昨年度以上に誰もが実践できるような研究内容をわかりやすく示していきたい。また、これまで本町のほとんどの学校が、県教育委員会の推進する重点支援校訪問に関わっており、その趣旨に沿ったより実践的な研究を進めていくことにした。

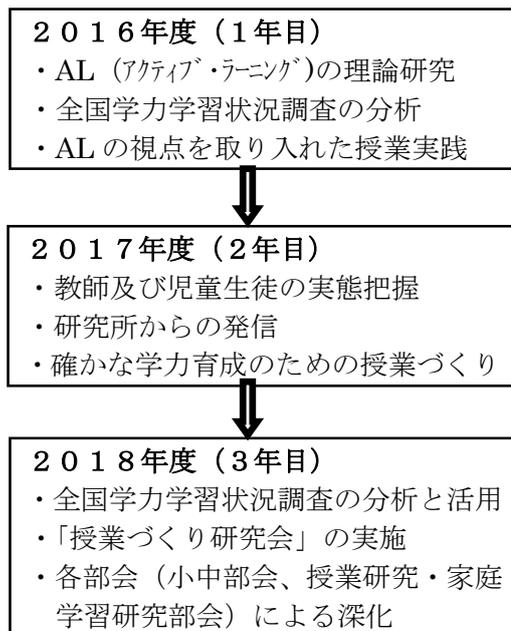
3 「高鍋の教育」を広げる・深めるために

右の図が学力向上をテーマとした本研究所の3年間の流れである。1年目の理論研究に始まり、より具体的で実践的な研究を心掛けてきた。特に2年目の研究において、「リーフレット（目指す高鍋っ子の姿）」の作成と「高鍋町の授業スタンダード」を提案できたことは大きな成果であった。

そこで、3年目の研究においては、これまでの実践と新学習指導要領の内容を関連付けながら進めていくことにした。まず、新学習指導要領の柱である「主体的・対話的で深い学び」については、昨年度に引き続き次世代型教育推進センターの内容を活用していく。また、全国学力学習状況調査の結果を点数のみならず、児童生徒質問紙をいくつかの項目に沿って検討する。その分析を踏まえ、小中部会や授業研究・家庭学習研究部会において、より深める取組を考えていく。

広げる活動としては、新たに「授業づくり研究会」を開催する。昨年度からすべての研究員の授業をビデオに録画し、授業動画を視聴しながら授業改善を図ってきた。本年度、この授業検討会を「授業づくり研究会」とし、研究員のみならず本町すべての教職員に呼びかけ、誰でもこの研究会に参加できる機会を作っていく。このことは日々の授業づくりに悩んでいる先生方に役立つものと確信している。昨年度からの、研究所便りなど研究所からの発信も継続する。このような取組を通して、「高鍋の教育」を本町全体に広げ、深めていきたい。

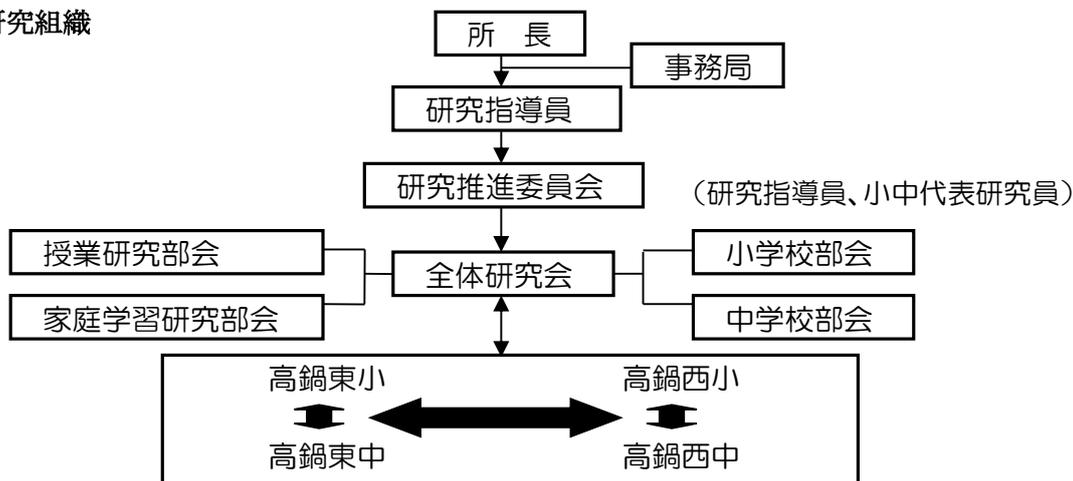
【 研究内容の変遷 】



III 研究仮説

全国学力学習状況調査を分析、活用し、「高鍋の教育」を広げる・深める取組を行うことで、児童生徒は主体的に学び、確かな学力を身に付けることができるであろう。

IV 研究組織



V 研究の実際

1 本町の子ども達の様子（家庭学習・授業）

学習に関して本町の児童・生徒はどのような状況にあるのだろうか。研究を進める際に、的確に実態把握をすることが求められる。今年度は全国学力学習状況調査（小学校6年生、中学校3年生）における児童・生徒質問紙を活用することにした。家庭学習に関係する3つの項目、授業に関係する3つの項目について、全国と比較することによって、本町の児童・生徒の良さと課題が把握できると考えた。なお、質問紙では4段階評価（1=よい、2=やや、3=あまり、4=悪い）となっており、下記のグラフにおいては肯定的評価（1・2の合計）を示した。

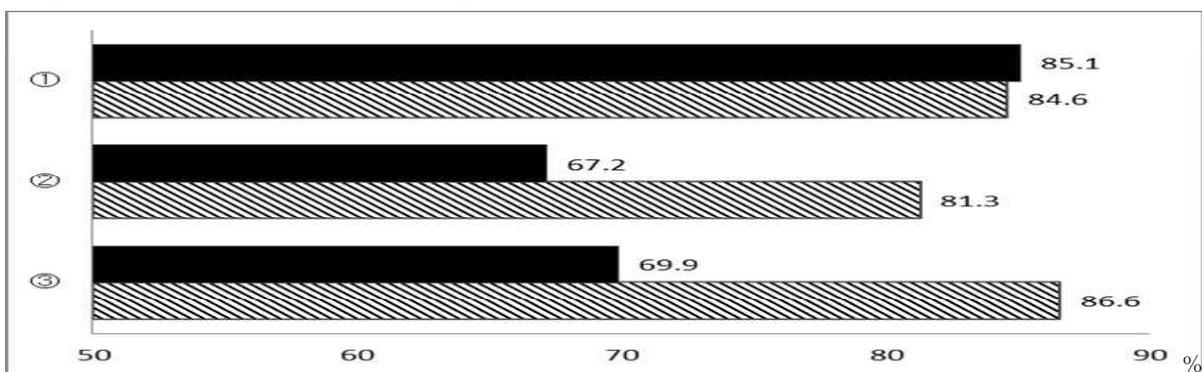
○ 家庭学習に関する項目

① 将来の夢や目標を持っていますか？

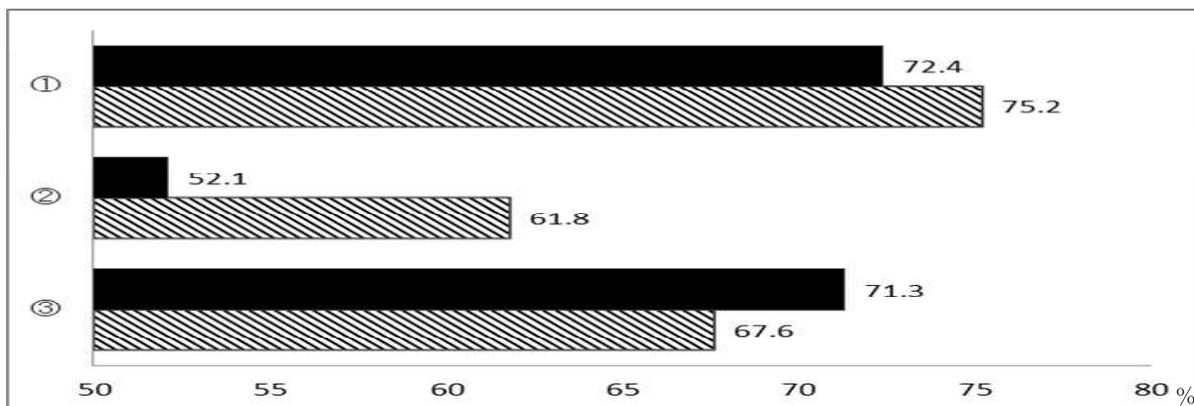
② 家庭学習において、自分で計画を立てて勉強をしていましたか？

③ 家で予習・復習やテスト勉強などの自学自習において、教科書を使いながら学習していましたか？

【 本町と全国の比較 小学校 】 上段（黒）が全国、下段（斜線）が本町



【 本町と全国の比較 中学校 】 上段（黒）が全国、下段（斜線）が本町



①（将来の夢・目標）については、小中ともにほぼ全国と同じ数値である。また、②（学習計画）では、小中ともに全国平均を大きく上回っている。③（教科書の活用）については、小学校は全国より上回り、中学校は全国よりやや下回るといった結果となった。小中学校ともに、家庭学習の状況は良好である。ただし、小学校で約15%、中学校で約40%の児童・生徒が、家庭学習において教科書をうまく活用できず、計画的な学習をしていないことがわかった。下位層の児童・生徒に対して家庭学習の具体的な手立てを示すことが必要である。

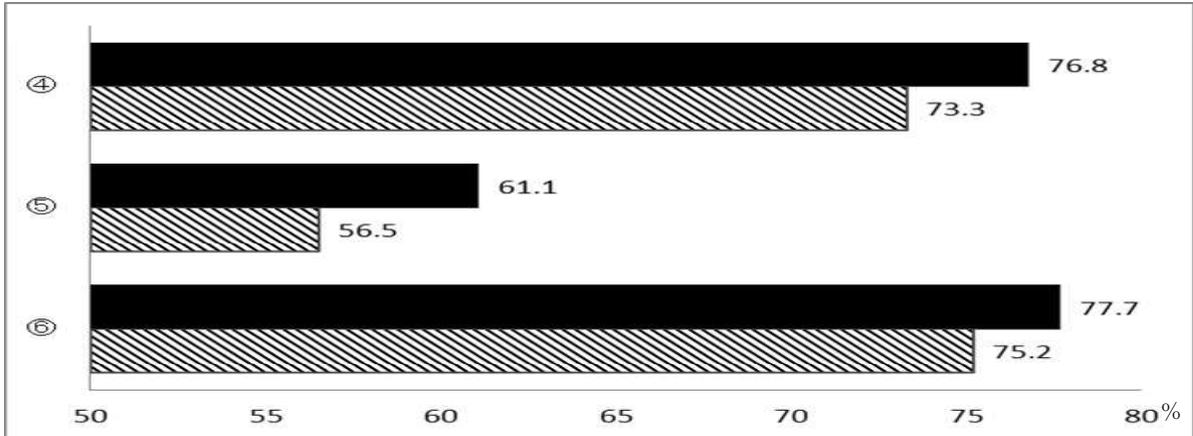
○ 授業に関する項目

④ 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか？

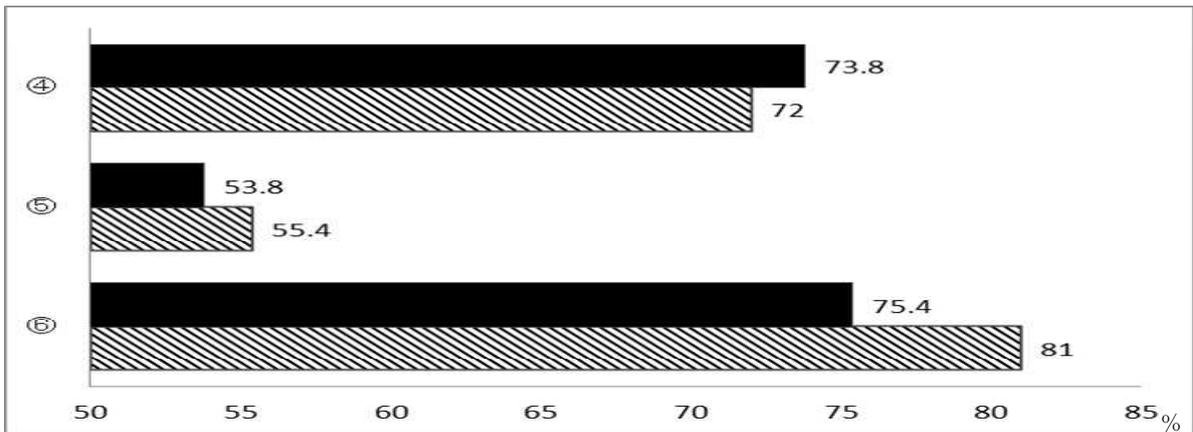
⑤ 自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか？

⑥ 児童・生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていたと思いますか？

【 本町と全国の比較 小学校 】 上段（黒）が全国、下段（斜線）が本町



【 本町と全国の比較 中学校 】 上段（黒）が全国、下段（斜線）が本町



小学校においては、④（課題解決）⑤（発表）⑥（話し合い活動）すべてにおいて全国を下回っている。ただし、1（よい）と答えた児童の割合は3項目とも全国平均より高く、発表や話し合い活動に自信を持っている児童と苦手な児童に大きな差があると思われる。また、中学校においては、⑤⑥で全国を上回っているが、小学校と同じように発表の苦手な生徒が約45%いることがわかった。傾向として、話し合い活動よりも全体の前で発表することに抵抗を感じている生徒が多い。また、④の数値が小中学校ともに全国を下回っていることや発表を苦手としている児童・生徒が多いことから、課題解決的な学習において発表の機会を計画的に取り入れることが望まれる。そのためには、各教科での取組にとどまらず、道徳や学級活動の時間、そして、総合的な学習の時間において、積極的に取り入れていくことが必要である。

小中学校4校を比較して、小学校においては家庭学習、授業の数値ともに大きな差異はなかった。しかし、中学校においては数値に大きな開きがあり、このことが試験結果にも表れていると感じた。このように、具体的な数値を全国と比較することで、本町及び各学校の良さや課題に気付くことができた。明確になった課題を克服するために、家庭学習研究部会、授業研究部会において、具体的な取組を行っていくことにした。

2 家庭学習研究部会の取組

(1) 学力向上リーフレット（目指す高鍋っ子の姿）の具現化について

昨年度、学力向上のため、どのような姿勢で学習に取り組ませればよいのかを示す「目指す高鍋っ子の姿(た・か・な・べ)のリーフレット」を作成した。今年度はその具現化を

目指し、具体的な実践方法例を考え、各学校及び各家庭で「広げる・深める」ことができるよう、研究所便りに掲載し、啓発と実践化を図った。

(2) 具体的な実践方法例

① 「た」～達成感を味わう子ども…振り返り学習の効果を高める「コンセプトマップ」

「わかった」と実感させるには、よい考えを聞いてわかるのではなく、新しく学んだ知識を自分の言葉で短く表したり、図や式で表現したりすることが「本当のわかった」と言える。それは、自分なりの表現の仕方よく、それを伝え合うことで、より深い学びとなる。その学習方法として、社会のまとめ学習では児童生徒がコンセプトマップを作成した。

＜主な学習方法＞

1. キーワードを示す
2. それを図や言葉等で関係を表す
3. 紹介し伝え合う

【児童・生徒の実践例一】

中学2年生社会

小学5年生社会

② 「か」～家庭学習をコツコツとがんばり続ける子ども…褒めてやる気を高める「自学効果」

学校で教師が子ども達の学習のがんばっている所を認め、さらに家庭で保護者が褒めてあげれば、どんな子どもでも嬉しいし、笑顔になり、さらに、自分に自信をもつことができるようになる。その自信が、継続的な家庭学習につながっていく。その方法として、自学(宅習)を頑張っているノートを教室で掲示したり、学級通信で紹介した結果、学級全体のやる気を高める効果が見られた。

褒められる → 自信をもつ → やる気が出る → 学力アップ!

③ 「な」～仲良く話し合い教え合う子ども…チームワークでその日の授業を振り返る取組

帰りの会の「振り返り」の時間で、生活班ごとに、その日学習した内容とポイントを教科書も使って振り返る。時間は、10分程度で行う。振り返った学習内容を踏まえて、家庭学習として何に取り組むかを選択し、その日の自学(宅習)につなげていく。取組の成果を紹介して、実践意欲を図った。

- 帰りの会での発表を意識して、授業内容の理解に努めるようになってきた。
- 家庭学習でその日の授業の復習を教科書も開いて行えるようになってきた。



今日の数学では、方程式の解き方を学習しました。ポイントは、移項すると符号が変わるということです。

【帰りの会の「振り返りの時間」】

④ 「べ」～勉強に進んで取り組む子ども…各種検定による主体的な学習習慣形成

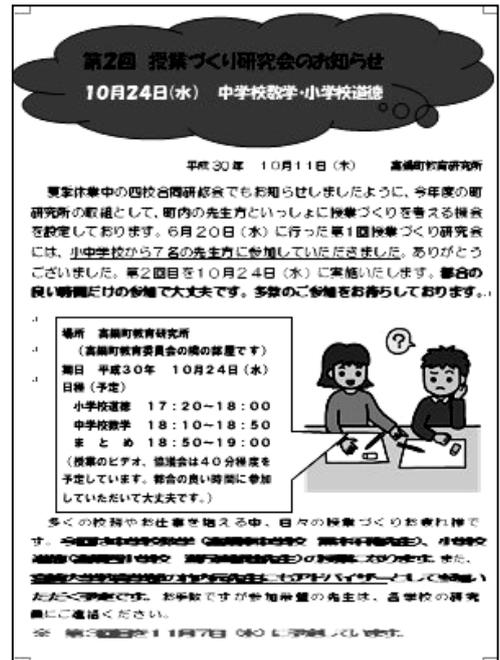
小学生・中学生の学童期、青年期(前期)に各種検定試験(漢字・英語・数学)を受ける経験をさせて学習習慣形成すると目標に向かって努力する喜びを得て、自分から努力をするようになる。そのことを、発達段階に応じた表を作成して紹介し意識化を図った。

実践例 その4～各種検定(漢字・英語・数学)による主体的な学習習慣形成					
時期	検定	自己統制	達成・有能感	自己認識	社会的満足
年齢	4～6歳	3～7歳	7～15歳	15～22歳	22歳～
成長への課題	哺乳、摂食、基礎的身体活動(歩行)、喃語(あーうー)、感覚遊び、甘え(親子の絆)				
	言語的要求、対人交流、目的遊び(お絵かき、積み木)、物事に対する関心				
	簡単な言葉の応答、ルール遊び、応用的身体活動				
	集団活動、課題達成、自己実現、価値観形成				
検定試験にチャレンジするメリット					
① 学習習慣を身につけるのに役立つ					
② 自信、挑戦心が芽生える					
③ 基礎学力を身につけることができる					
7歳 学校教育スタート(視覚による記憶可能)⇒			3歳 習い事チャレンジ(対人交流可能)⇒		
区分	乳児期	幼児期	学童期	青年期(思春期)	成人期
観決断時期	▲3歳	▲7歳	▲12歳	▲15歳	▲18歳

3 授業研究部会の取組

(1) 本町の「授業づくり研究会」の考え方

子ども達が学校生活で過ごす時間のほとんどは授業時間である。私たち教師は教材研究を含めて、非常に多くの時間と労力を授業づくりのために費やしている。しかし、本当の意味で子ども達の充実感を高める授業が提供できているか疑問が残る。宮崎県教育委員会ではすべての先生方の授業力向上を目指して、「授業における4+4のチェックポイント」を提示し、重点支援校訪問等による授業改善に力を入れている。昨年度、本研究所では確かな学力を身に付けさせる「できる学力の授業」「わかる学力の授業」の研究及び実践、そして、「高鍋町授業スタンダード」の作成などを行った。また、研究員全員が自分の授業をビデオに撮り、その授業動画をもとに授業分析を行っていった。授業動画を流しながら、授業者がポイントを説明するやり方とした。大切な場面では、動画を止めて、子どもの様子を観察したり、授業者の発問や問のとり方などを協議したりした。田村学氏は優れた授業づくりのため、「授業のイメージ力を高める方法」を3つ示している。



【 授業づくり研究会のチラシ 】

- 自ら授業を実践し、多くの人に参観してもらう
- 多くの優れた授業実践を参観する
- 日々の授業実践について語り合う

この3つの考えに従い、今年度は町内小中学校すべての先生方に、研究員の授業を見る機会を設定することにした。そして、「授業づくり研究会」を3回〔6月20日(水)、10月24日(水)、11月7日(水)〕実施した。どの研究会においても、小学校と中学校の授業をそれぞれ提供し、研究員と参加された先生方で授業検討を行った。また、毎回、宮崎大学教育学部の竹内元准教授に専門的なアドバイスをしていただいた。授業の流れにおいては、「高鍋町の授業スタンダード」を参考にし、昨年度同様、次世代型教育推進センターの「主体的・対話的で深い学び」の項目を指導案の中に取り入れていった。

1 主体的な学び	① 興味や関心を高める	② 見通しを持つ
	③ 自分と結び付ける	④ 粘り強く取り組む
		⑤ 振り返って次へつなげる
2 対話的な学び	① 互いの考えを比較する	② 多様な情報を収集する
	③ 思考を表現に置き換える	④ 多様な手段で説明する
	⑤ 先哲の考え方を手掛かりとする	
	⑥ 共に考えを創り上げる	⑦ 協同して課題解決する
3 深い学び	① 思考して問い続ける	② 知識・技能を習得する
	③ 知識・技能を活用する	④ 自分の思いや考えと結び付ける
	⑤ 知識や技能を概念化する	
	⑥ 自分の考えを形成する	⑦ 新たなものを創り上げる

このような趣旨のもとに、「授業づくり研究会」を実施したわけであるが、以下にそれぞれの授業及び授業検討の概要を紹介する。

(2) 第1回授業づくり研究会〔6月20日(水)〕

ア 学年・教科 (中学校第1学年 理科) 授業者 (高鍋西中 田邊 文彦 教諭)
 単元名 植物のくらしとなかま ～葉のつき方と日光の関係～

【 授業のねらい 】

- ・ 植物の葉のつき方について、その共通点や相違点に興味をもち、調べようとする。
- ・ 葉のつき方の共通点や相違点をあげ、日光の当たり方と関連づけて考えることができる。

【 授業の流れ 】

1. 光合成のエネルギー源が「光」であることに着目する。1-①
2. 植物の葉のつき方には、一定のきまりがあることに気づかせる。1-②
3. 対生、互生、輪生、根生(ロゼット)に気づき、予備知識を得る。3-②
4. 葉のつき方が左右対称になり、重ならないことに目をつけさせる。3-⑥
5. 植物の葉のつき方(互生)を実際に模型でシュミレーションしてみる。3-⑦
6. 光合成が効率的にやれるようになっていることに気づく。3-⑥
7. 葉序について触れ、2/5葉序に触れる。ーフィボナッチ数2、3、5、8…
8. 2、3、5、8…のキーワードで葉のモデルをつくる。3-⑦
9. 植物の「進化」という考え方で葉序が自然に出来上がることに触れる。1-⑤

【 授業及び授業検討会の感想 】

- ・ 「葉序」という教科書では簡単に扱われる部分にあえて焦点をあて、対生、互生、輪生、根生(ロゼット)に気づかせる最初の授業目標には容易に達することができた。
- ・ 葉のつき方のモデル実験を通して、葉のつく枚数には一定のきまりがあることは理解できた。しかし、3枚、5枚の葉のつき方があるのに4枚ができないことは、科学的思考を育てるにはやや厳しい内容であったと考えた。
- ・ 教材を見える化し、「思考ツール」(思考の支えになるもの:ワークシートや道具、人間関係等)を開発することの大切さをアドバイスしていただいた。

イ 学年・教科 (小学校第4学年算数) 授業者 (高鍋東小 東 公代 教諭)
単元名 1億をこえる数

【 授業のねらい 】

- ・ 末尾に0や万のつく大きな数のかけ算や、末尾に億や兆のつく大きな数の加減の計算を既習の計算結果から相対的な見方を活用して計算することができる。

【 授業の流れ 】

1. 学習の見通しを立てる。1-①
2. 解決する
(1) 個人で解決をする。1-④ (2) 全体場で確認する。2-①
3. 第2問に取り組む。(35万×27万)
(1) 個人で解決をする。1-④ (2) 全体場で確認をする。2-①
4. 第3問に取り組む(35億+28億 63兆-35兆)
5. 本時学習をまとめる。1-⑤
6. 習熟を図る。3-②

【 授業及び授業検討会の感想 】

- ・ 導入で、「おや?今までの考えを使って何とかいけそうだ」という児童の反応から導入のよさがうかがえたという感想をいただいた。
- ・ 間違った答えを堂々と言い合える学級の学び合う雰囲気が一番大事だということも感想でいただいた。
- ・ 内容を精選して習熟を図る時間の確保をしっかりとすべきだと反省した。

(3) 第2回授業づくり研究会〔10月24日(水)〕

ア 学年・教科 (小学校第2学年 道徳) 授業者 (高鍋西小 満行真都佳 教諭)
主題名 規則の尊重 (C-14) 資料名 「一りん車」

【 授業のねらい 】

- ・ みんなで使う物を自分さえよければという使い方をするこの問題について考え、みんなが気持ちよく生活できるようにしようとする態度を養う。

【 授業の流れ 】

1. 学級のきまりを確認し、しっかりと守れているか振り返る。1－②③
2. 学級の現状を確認し、めあてへとつなげる。1－①②
3. 気持ちメーターによって、主人公と周囲の気持ちとのズレに気づく。2－③
4. 「きまりを守るために大切なことは何か」についてグループで話し合う。2－①⑥
5. これからの自分について考える。3－④⑥

【 授業及び授業検討会の感想 】

- ・ 「考え、議論する道徳」を目指して話し合いを設定したが、議論には2つの気持ちまたは立場が必要だということが分かった。今後は、資料の中で葛藤する場面が見られる際に議論の場を設定していく。
- ・ 本時では発問が多かった。発達段階に応じて発問の精選をしていきたい。

イ 学年・教科（ 中学校第1学年 数学 ） 授業者（ 高鍋東中 黒木千穂 教諭 ）

単元名 変化と対応

【 授業のねらい 】

- ・ ともなって変わる量を問題の中から見つけ、その関係を表やグラフに表して考察できるようにさせる。

【 授業の流れ 】

1. 小学校での学習内容を想起させる。
2. 本時のめあてを確認する。1－②
3. 本時の学習課題を確認する。1－②
4. 正方形の方眼紙に展開図を書いて、考察する。3－②
5. 表やグラフで関数のようすを調べる。2－① 3－②③
6. まとめを行う。3－⑤
7. 導入時にあがったほかの量の中から1つを選んで変化のようすを調べる。3－③
8. 確認問題に取り組む。3－①
9. 本時のまとめを聞き、次時や今後の学習内容に関心をもつ。1－⑤

【 授業及び授業検討会の感想 】

- ・ 今回の授業内容は、初めの1時間で小学校の既習事項の復習をし、次の時間に関数の導入を行うといった2時間扱いでも良かった。
- ・ 「まとめ」を自分たちで行うなど、学習内容をアウトプットする活動を設けていく必要がある。数学は、答えを求めるための考える過程が大切なので、家庭学習でも自分が考えたことをさらに追究できるような課題を設定する。



【 授業づくり研究会のようす 】



【 大学の先生による授業分析 】

(4) 第3回授業づくり研究会〔11月7日（水）〕

ア 学年・教科（ 小学校第5学年 国語 ） 授業者（ 高鍋西小 向井永吉 教諭 ）

単元名 意味をそえる言葉に目を向けよう

【 授業のねらい 】

- ・ 意味をそえる言葉によって文の意味合いが変わることを理解する。

【 授業の流れ 】

1. 同じ場面に対する3つの例文をプレゼンによって提示し、課題把握をし、本時のめあてを確認する。1-①
2. 本時の流れをワークシートで確認する。1-②
3. 提示された場面から、意味をそえる言葉を考え、ワークシートに記入する。1-④
4. 例文の意味をそえる言葉から、話し手の意図を考え、友達と話し合う。2-①②
5. 本時のまとめを、学習した内容から考え、自分の言葉で書く。
6. 練習問題を解き、習熟を図る。1-④ 3-①③
7. 解いた問題について、友達同士で確認し、説明し合う。1-⑤ 2-②③

【 授業及び授業検討会の感想 】

- ・ パワーポイントによるプレゼン、ワークシートを使用することで、児童が課題把握や見通しをもてるよう工夫した。ワークシートに解決の手がかりを示すことで、全員が課題に取り組むことができた。
- ・ 検討会を通して、言語を扱う場合にねらいを達成するための習熟の在り方を学んだ。また、普段から「発言の質」を向上させるために、他者意識をもたせるような指導をしていくことや接続語の使用や教師の発問力を磨くことの大切さを学ぶことができた。

イ 学年・教科（中学校第3学年 道徳） 授業者（高鍋西中 染矢 直樹 指導教諭）
主題名 強い意志（A-4） 資料名「奇跡の心臓手術に挑む」

【 授業のねらい 】

- ・ 心臓外科医（須磨さん）の取った行動を考えさせることで、目標への達成を目指し、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げるようとする心情を高めさせる。

【 授業の流れ 】

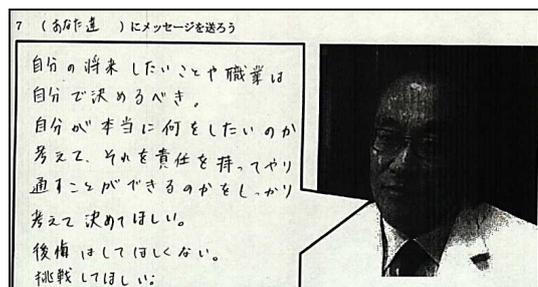
1. 年収が高い仕事のベスト5を予想する。1-①
2. 須磨さんの写真を見て、どんなタイプの医者かを予想する。1-①
3. 須磨さんのプロフィールなどを知り、本時のめあてを確認する。1-②
4. 動画1を見て、日高さんの手術の様子を確かめる。
5. 動画2を見て、日高さんの手術の結果を知る。〔手術の結果・マスコミの反応〕
6. 自分だったら、2度目の手術（大島さんの手術）を行うかを考える。2-①⑥
7. 本文を読み、手術を行うと決めた須磨さんの言葉を考える。1-③ 3-③④
8. 動画3を見て、大島さんの手術の様子を知る。〔手術の結果・退院時の様子〕
9. 須磨さんの立場になって、メッセージを考える。1-③ 2-③ 3-④⑥

【 授業及び授業検討会の感想 】

- ・ 「考え、議論する道徳」を意識して、2度目の手術を行うかどうかのモラルジレンマの場面を取り入れた。須磨さんの立場になったり、友達の意見を聴いたり、自分の考えをまとめたりする活動を通して、共感的理解を深めることを目標とした。
- ・ 進路学習の一環として、仕事への責任感や充実感を感じる場面を取り入れた。また、最後の須磨さんからのメッセージを考えさせることにより、受験時期にある自分自身を励まし、更に進路実現への意欲を喚起できるように工夫してみた。

(5) 「授業づくり研究会」を通して

本町全体に研究内容を広げることやみんなで授業力向上を目指すことを目標に3回の「授業づくり研究会」を実施した。勤務時間外の時間設定であったが、最終的に各校の若手職員を中心に延べ23名の教職員の参加があった。まだまだ課題も多いが、授業力向上のための1つの形を示すことができた。今年度から教科化された道徳（小学校）の実践を始め、今後、更にたくさんの教科等で授業実践・検討を行っていきたい。



【 須磨さんの立場で書いたメッセージ 】

VI 研究の成果と課題 (成果：○ 課題：●)

- 夏季休業中の4校合同研修会や1月のPTA研修会での報告、研究所便り、3回の「授業づくり研究会」などを通して、研究所で取り組んでいることを町全体に伝えることができた。
- 授業づくり研究会の実施や準備に時間がかかり、研究員全員で「高鍋町の授業スタンダード」「主体的・対話的で深い学び」を深めることが今一步であった。
- 全国学力学習状況調査の結果を分析したことで、児童生徒の実態に合った学力向上の研究を系統的に進めることができた。
- 本町の児童生徒がどのように変容しているのか継続的にデータを取り、経年変化を確かめていかななくてはならない。また、小中間での共通理解が必要である。
- 研究員全員の授業をビデオに録って検討することで、より実践的な研究を行うことができた。「授業づくり研究会」に研究員以外の教職員が参加できたことで、町全体の授業力向上につながるきっかけ作りができた。大学の先生のアドバイスも効果的であった。
- 時間帯の問題もあるが、参加する教職員をさらに増やしていく取組が必要である。
- 昨年度作成したリーフレットを意識した実践を行うことができた。研究所便りで家庭学習の取組を伝えることができた。
- すべての児童生徒に合わせた家庭学習の推進について、さらに研究を進める必要がある。

VII 終わりに

本年度で3年目を迎えた「学力向上」をテーマとした研究であった。本町の教育研究所が果たす役割を確かめながら、どうしたら本町すべての教職員の授業力向上に貢献できるか考えた結果、3回の「授業づくり研究会」を実施した。本町で初めての試みであり、こちらの意図通りに実践できなかつた部分もあるが、小学校、中学校を含めた授業を計6回、動画により直接公開することができた。竹内先生による授業分析も、本当に意義があるものであった。また、家庭学習のやり方について、一端であるが実例を示すことができた。

「何のために研究をするのか」「児童生徒が満足する授業はどんなものか」。私たち教職員はいつも問い続けなくてはいけない。最終的に主役となるのは、児童生徒である。児童生徒全員が生き生きと活動し、充実感を味わわせる授業を行うことを忘れてはいけない。そのような授業のためには、まだまだいくつもの高く困難なハードルを越えていかななくてはならないが、次年度以降も今の気持ちを忘れずに、本町の研究が進んで行くことを望みたい。最後に1年間細やかな指導をいただいた研究指導員の先生、全面的にバックアップして下さった高鍋町教育委員会の皆様に感謝し、今後とも研修に励んでいきたい。

【 引用・参考文献 】

- | | |
|--------------------------------|--------------|
| ・ 「新たな学びに関する教員の資質向上のためのプロジェクト」 | 次世代型教育推進センター |
| ・ 「授業を磨く」 | 田村 学 東洋館出版 |
| ・ 「授業の見方」 | 澤井 陽介 東洋館出版 |
| ・ 「AL時代の振り返り指導入門」 | 梶浦 真 教育報道出版社 |
| ・ 「平成29年度 教育研究報告書」 | 高鍋町教育研究所 |

【 研究同人 】

所長	川上 浩	教育対策監	黒木 倫徳
指導主事	黒木 秀一	研究指導員	黒木 俊和
高鍋東小	田代 裕一	東 公代	
高鍋西小	向井 永吉	満行 真都佳	
高鍋東中	押川 順一	黒木 千穂	
高鍋西中	染矢 直樹	田邊 文彦	